—緑の笛豆本・41号—

—弘前・緑の笛豆本の会・発行—

四行詩集

現身

一戸 謙三 著

緑の笛豆本
第四十一集

昭和45年8月19日写　72才

〈装画〉　亀山　巌

序詩

ほとけはつねにいませども
うつつならぬぞあはれなる
ひとのおとせぬあかつきに
ほのかにゆめにみえたまふ

——梁塵秘抄——

〔現身〕―(1)現世にある身。うつしみ。
(2)法身、報身とともに仏如来三身の一

目次

（昭和二十八年―昭和三十八年作）

序　詩

琴の音（六章）
母亡し（六章）
墓（六章）
仮りの身（四章）
ひとすぢの煙（三章）

かなしき歌（四章）
渚（三章）
月かげ（三章）
返る空（四章）
くぐひのいしぶみ（一章）

略　歴

琴の音

こころざし忘れざらめや

その一

格子戸(かうしど)この朝とざされ
琴の音(ね)まぼろし艶立(えんだ)つ
別れむ万年菊はや
わかやぐ陽(ひ)の身にわりなし

その二

四阿(あづまや)去りひとりし立つ
雨の降りし庭路(にはみち)ぬれ
わすれなぐさ摘みしひとの
別れし裏木戸破(や)れはつ

その三

眠らざりし朝の霧や
つゆくさ剪る姿あらず
つれもなき想のはてし
猫啼けり花柏垣あり

その四

白き椿石に落ちて
月は細し肩やせしひと
枝垂柳　池は暗く
築地に髪かなしかりし

その五

かすみ草机にみだれ
かなしかり指組み合せ
青蚊帳に鏡透くゆゑ
壁に立つ姿もあらめ

その六

朝の窓　柴垣荒れて
雨降れりひなげしの花
こころざし忘れざらめや
あかしやの梢さやぎて

母亡し

送られては帰らぬ道

その一

母亡しと渡る板橋
這ふ煙立ちてなびけり
はるかなる林の汽笛
はての日は思はざるべし

その二

なほ残る畳の薄日（うすび）
梨ひとつ机に淡し
きりぎりす汝（な）が頬冷えぬ
涙なく忘れむはてし

その三

照る雲に大杉そびゆ
尾花折り母はゆきたり
寺の屋根疎林に遠し
送る畦風かすかなり

その四

日を数へ墓去らんとす
ひさしくも崖に見し雲
陽にかざし指をひらけり
ひとむらの笹の葉青し

その五

したたる雨　炉に坐す夜
時計はこほろぎ待ちたり
知られず鏡に立つ母
床の間しら菊をしづむ

その六

灯の窓独りに消されぬ
ひそまる堀こたへもなし
送られては帰らぬ道
オリオン額にするどし

墓

現れてとどまるはなし

その一

雨しのびて縁にて坐す
揚羽の蝶　敷石立つ
あへなくひらける現(うつ)し身
紫陽花(あやめさる)来む世もあるべし

その二

跨線橋わたらざるべし
梢に忘れむ新月
越えがたき愁ならんや
小雨に街の灯(ひ)にじめり

その三

問はざれば流れゆく雲
とどまれよ墓ここにあり
転身は望むべからず
てのひらに落葉あかるし

その四

つらなりて砂に柵立つ
月見草まぼろしと言ふ
つきざりし歎き世になし
罪あらじ海かがやけり

その五

秋の蝶ささなみ近し
沁む風に慰めありや
現れてとどまるはなし
白菊に行方をしるす

その六

秋雲さかしらあらんや
サルビアひとたび死ねかし
在る故さながら流れよ
さらばよ汝にわれなし

仮りの身

スバルよ告ぐるに事なし

その一

めぐり来てはてなしなほあり
悲しみにカンナをのこす
めぐみありかぎり知るべし
カシオペア独りにあらず

その二

この門はわれにうつらず
越ゆるとも想のこれり
コスモスをおとずれんとす
来し方のはてに声あり

その三

かくしてひと去り世はあり
返らざる秋草知れよ
カペラよかなしみあらざり
変りしは身のつねならず

その四

スバルよ告ぐるに事なし
かたどれば姿あらはる
すべてに別れて空あり
仮りの身ようつくしかりき

ひとすぢの煙

悲しみをひらくむなしさ

その一

かざられて巡りしはてし
悲しみをひらくむなしさ
かたむきてならび立つ影
数々のかたちを散らす

その二

いはれなく滴りやまず
いらへなく流れはてなし
生きしかぎり知るべからず
いつたび死しては目ざめむ

その三

ひろがりし眺めを結ぶ
ひそかなるこだまの返し
久しくもとどめし歩み
ひとすぢの煙にたどれ

かなしきうた

つきざるえにしとなくむし

その一

つぼあをしかたむくひざし
つれもなしつくゑはむなし
ことばなくすがたほのけし
こえがたしかがみさやけし

その二

しろきかやらんまはくらし
ときすてしだてまきかなし
しんじえぬこころならんや
とこのまにあぢさゐあはし

その三

つきかげかがみにかへらず
かたやせほほゑむひとなし
つきざるえにしとなくむし
かもゐにかげをれかたらず

その四

かがみありてかぎりをしる
かたみにみしながめいとし
かりのすがたなほうつくし
かなしきうたかぜにかへる

渚

あをきなみゆめわすれえず

その一

みさきはみどりにただよふ
みはかなしうみはうつくし
かもめよこころをひらけよ
かがやきておきにくもあり

その二

あしあとはなぎさにむなし
あをきなみゆめわすれえず
あいしてはしんずるなかれ
あらきいはさけてあわだつ

その三

ふねすなにざしてくちたり
なくかもめよがけくづれぬ
ふたたびめぐみのあらんや
なぎさによべどもみちなし

月かげ

なつかしき来む世のしをり

その一

数ふれどつらなるかぎり
かざられて流転をつくす
土暗くかげりかなしき
かすかなる月かげにあふ

その二

忘れえぬしたたり絶えず
なつかしき来む世のしをり
別れよと月かげ知りぬ
なげかざれ波はかへらず

その三

えらびてし道つねならず
枝のこす月かげありき
つれもなき江のしめやかさ
尽きざりしえにしなりしを

返る空

忘れえぬ花のつれなさ

その一

消ゆる道いざなふかげり
霧のこゑ返りて遠し
きらめける水のはるけさ
極まりを愁ひにしづむ

その二

そよぎ立てる梢あをし
そそぐ日の溶けてかがよふ
添はざれど悲しみあらず
空にふかく言葉しるす

その三

忘れえぬ花のつれなさ
わたされてひとりと知るや
別るるを時とどめえず
わびしさに鳥飛び去れり

その四

かざせる手に風を流す
変りしは世のつねと言ふ
かたどる夢散りてむなし
返る空うつくしからむ

くぐひのいしぶみ

ほめなむ　つがるの　ひじりよ
くちざる　いさをは　のこりぬ
ほほゑむ　ゆたけき　おもかげ
くぐひの　いしぶみ　とはなれ

略歴

＊明治三十二年（一八九九）二月十日、弘前市本町四丁目に彦三郎長男として生まれる。父は津軽藩御用達商人一野屋家の七代目だが松濤楼子彦と号する風流人であった。

＊大正六年（一九一七）県立弘前中学校卒業、大正九年（一九二〇）慶応医大本科一年

を退学してから、小学校、青年学校、中学校の教員を勤め、昭和三十一年退職する。

＊大正六年十一月父（四十三才）に死別し、大正八年（一九一九）から玲太郎と号し、県詩壇の草分けである弘前のパストラル詩社同人となり、福士幸次郎に師事して詩作を始める。自由詩、散文詩、方言詩、四行詩、訳詩そして評論、随筆などを発表し、昭和三十五年第二回県文化賞、昭和三十七年第五回県褒

賞を受ける。

＊昭和十一年津軽方言詩集「ねぷた」、昭和二十三年詩集「歴年」、昭和三十四年四行詩集「椿の宮」、昭和四十年「自撰一戸謙三詩集」を刊行する。

＊現住所

青森県西津軽郡木造町松上町

現身

限定二五〇部の内

本冊は

第 159 番本

奥附

緑の笛豆本第11期第41集

現身　一戸　謙三著

昭和四十七年一月一日発行

編集・発行者　蘭　繁之

発行所・弘前市蔵主町十一

緑の笛豆本の会